村を救った重右衛門

下川沿の川口には、代々重右衛門を名のり、ムラの長をつとめる大地主の家があった。この話は六代目、七代目の重右衛門のこととといわれる。

今から一五〇年ほど昔に「天保の大けかち」といわれた大飢饉があり、餓死する者が多く、「口べらし」ということで生まれてくる子を間引きすることも少なくはなかった。このとき重右衛門は、非常の場合に貯えておいた三年米、四年米をムラ人に分け与えて多くの人命を救った。重右衛門はムラ人だけでなく、近くの町や村にも分け与え、郡の役所へも大量の米を寄付し、生き神様と敬まわれた。古文書には「天保四年の凶作にあたり、多

くの米を出し、村の貧民を救い、生き神と敬まわれた。近くの貧民や郡方へ銭千貫文、米百石を寄付し、苗字帯刀を許された」とある。

息子の七代目重右衛門は、父のこうした志を継ぎ、荒野を開拓しつくった田畑をムラ人に耕作させた。また、水不足に毎年悩む川口地区の人々のために、遠い蛭沢(北秋田郡田代町)からトンネル工事をふくめた大水路工事を企画し、自家の財産の半ばを費し、藩主からも援助を得て作業を進めたが工事は完了せず、凶作がつづき自分の食料にも苦慮し、一時工事の中止のやむなきに至った。その意志は受け継がれ、孫にあたる礼之助が、ムラの有力者である小林要助、佐藤源助、斎藤栄太郎らの協力により、明治二六年(一八九三)に水路を完成した。